



「JRAホームブレッドの役割」

“JRA ホームブレッド”という言葉をご存知でしょうか。日高育成牧場では平成10年に生産育成研究室を開設し、繁殖および生産育成に関する研究に着手しましたが、当時の繁殖牝馬や生産馬は研究馬という位置づけで血統登録はありませんでした。一方、軽種馬生産育成のあり方検討会などの報告によりますと、日本産馬の資質は血統および後期育成技術の向上などにより、飛躍的にレベルアップが図られてきました。しかし、生産から初期・中期育成期には多くの課題が残されていることが指摘されています。そこで、日高育成牧場では本分野の調査研究を強化するため、繁殖牝馬のお腹の中から競走馬になるまでの一貫した生産育成業務を、平成20年の交配から開始しました。そして、平成21年以降に誕生した産駒は、1歳セリ市場で購入したJRA 育成馬と同様に、育成調教後にJRA プリーズアップセールで売却し、競走裡で検証しています。これらのJRA が自ら生産した馬をJRA ホームブレッドと呼んでいます。今回はJRA ホームブレッドを活用して取り組んでいる調査研究についてご紹介します。

最初は妊娠馬の乳汁のpH値の測定による分娩時期の推定方法です。分娩日が近づくとpH値は低下していきますが、pH値が6.4に達していなければ当日の分娩は起こらないことがわかりました。これによりpH値が6.4に達していない夜間の分娩監視は必要なくなり、生産者の労力軽減につながっています。本法は簡便で迅速かつ正確なことから生産界に広く普及



グランシェリー 中京2歳ステークス優勝
(今年デビューのJRA ホームブレッド/JRA 提供)

日本中央競馬会
日高育成牧場
場長

山野辺 啓



されています。

二つ目はサラブレッド種の経産空胎馬の乳母としての活用です。出産後の母馬の死亡や育子放棄などで母乳が絶たれた場合、子馬は人工哺乳または軽種馬以外の乳母によって育てられます。ところが、前者は夜間の哺乳などの人的労力が多大なことや子馬の社会性が欠如しやすいこと、後者は乳母の導入費用や外部から乳母を導入することによる防疫上の問題が生じるなどのデメリットがあります。そこで、自牧場で繋養している経産空胎馬にホルモン処置で泌乳を誘発し、乳母として活用する方法を検討しました。本法は比較的気性の荒いサラブレッド種を乳母にする難しさはありますが、空胎馬は乳母として活用できるとともに、当該年の交配・受胎も可能であり、費用対効果の面から有用な方法であると考えられます。

三つ目は生後1～8週齢の子馬にみられる種子骨の線状陰影で、球節部のX線検査において前肢で約50%、後肢で約10%に認められることが明らかとなりました。これまでは跛行、疼痛や腫脹という臨床症状はみられないこと、前肢では通常1、2ヵ月後には線状陰影が消失することから気付かずに見過ごされていた所見です。要因は腱や靭帯が未発達な子馬が、広い放牧地を母馬の後について走り回るためと考えられています。本所見は病的なものか生理的なものか、また競走能力に影響するものかを含めて、子馬を広い放牧地に放牧開始する適期について検討しています。

四つ目は厳冬期の放牧管理方法です。近年、寒冷地である日高地区で冬期間の昼夜放牧が試行されています。厳冬期の昼夜放牧と昼放牧のどちらが優れているかを結論付けることは困難ですが、各々の特性や注意点を明らかにすることで、安全かつ馬の健全な成長を促進する放牧管理が可能になるものと期待しています。

日高育成牧場では、その他様々な課題に取り組んでおり、詳細はJRA 育成馬ホームページ <http://www.jra.go.jp/training/index.html> をご覧ください。このように、JRA はJRA ホームブレッドを始めとしたJRA 育成馬を活用することで、生産育成期の飼養管理技術の向上、ひいては“強い馬づくり”に貢献できることを願っています。